



the Economics of Happiness

幸せの経済学





2011年1月、真に幸せで持続可能な社会を目指し「幸せ経済社会研究所」を設立した環境ジャーナリストの枝廣淳子さん。その枝廣さんによるヘレナ・ノーバーク=ホッジへのインタビューが実現しました。作品を通して考える経済成長や豊かさ、私たちのあるべき姿とは——。ヘレナが思いを語ります。

協力：幸せ経済社会研究所 <http://www.ishes.org/>

■ラダックで起こったこと、世界で起こっていること

枝廣淳子（以下、枝廣）：まずは映画制作の背景について、お話いただけますか？

ヘレナ・ノーバーク=ホッジ（以下、ヘレナ）：ラダックでは、それまで失業はなかったのに、経済開発と経済成長の影響で不必要に失業が生み出されてきました。さらに、汚染という深刻な問題も発生しました。そして最も重要なことは、失業によって人々の間にそれまで存在しなかった激しい競争が生まれ、地元の人々の間に摩擦が生じたということです。

ラダックが初めて世界に国を開いたとき、——私は現地の言葉を習得していたからわかったのですが——、西洋的な都市型の消費者文化を美化するメディアのイメージが入ってきました。すると、若者たちは、自分たちの食べ物や衣服、言語、皮膚や目の色を明らかに拒絶するようになりました。

このことは、ラダックだけではなく世界各地で見られることです。これを目の当たりにすることはつらいことでした。支配的なグローバル消費者文化が、自己否定や果てには自己嫌悪を引き起こしていたのです。これが暴力や怒りを増長させます。なぜなら、自分に自信がない人は、他人も大事にしないからです。

これが世界的な現象なのだ——私はそのことを映画で取り上げたかったのです。



■世界は前進しているか？

枝廣：世界には前向きな変化が出てきていますか？

ヘレナ：人々が気づきつつあり、議論が増えていることは確かで、大きな希望を感じます。特に、金融危機後には多くの人が考え直すようになりました。

しかし、各国政府は今のところ、しなければならないことをしていないことは明らかです。メディアでこれらの問題についてさらに議論を深めることが必要です。そうすれば、人々の行動がもっと増えるでしょう。人々が環境を守りたいと思う気持ちを貧困や失業についての懸念とも関連づけることができます。

■経済にとって大事なものは何か？

枝廣：経済成長については、「経済成長は持続可能ではないが、脱成長は不安定をもたらす」というジレンマがあります。「現在の構造においては、経済を動かし、雇用を創出し、老後の年金などを提供するためには、経済成長が不可欠だ」と言う論に対して、どうお考えですか？



ヘレナ：私の考え方は大半の経済学者とは違います。長年、世界でも工業化があまり進んでいないラダックやブータンといった地域に住み、最も工業化が進んだ地域でも過ごした経験から「経済について考え直すときには、農業や資源の採掘について深く理解しなくてはならない」と思っています。

つまり、生態学的な見方ですね。「私たちの豊かさと私たちが使うものはすべて自然の中にある」ということを十分理解した上で考えれば、自然では多様性が必須であることがわかります。

生態系に関する知識と多様性の尊重が必要だということは、真摯に考えてみるとより明らかになります。小さな規模で土地にくまなく手入れしようと思えば、より多くの人を雇用することになります。林業や漁業では、大規模な皆伐や流し網ではなく、選択的に伐採や漁獲をするのです。

工業システムが作りだしたのは大規模な手法だけではありませんが、各国政府は現在、大規模な手法がさらに拡大し、大量破壊の度合いが増すように支援しているのです。教育や医療など、自然や人間と関わるほぼすべての分野では、より多くの人間の働き手が必要です。こうした分野では、人間の数を減らすのではなく、むしろ増やす必要があるのです。

■鍵は、多様化と地域化

枝廣：映画では、大規模な現代農業と地域密着型の小規模農業の収穫方法が大きく違うというシーンがありますね。

ヘレナ：鍵を握っているのは、より伝統的な側面を見直し、新しい地域化のイニシアチブを検討できる大局的な視点だと思います。例えば農業では、さまざまな逆境にもかかわらず、地元の直売所で販売することで成功している農家の例があります。素晴らしいことにこうした直売所では、市場のシグナルによって、大規模なモノカルチャーから多様性へ、農家の移行が促されているのです。農家は経済的にも多様性に関心を持っています。

多様化が進めば、風やあられや病気などの害が発生しても、すべてに同じ被害が出るわけではなくになります。すると農業や化学肥料の使用量も減らせます。近くの直売所で販売すれば、仲買業者もいないため、売上は時には10倍以上になります。売上が増える一方で、投入物が減ることで生産コストは下がります。

■GDPは何を測っているか？

ヘレナ：経済成長の意味について根本的に考え直す必要があります。人々が自給自足の方向へ向かうとGDPは下がります。生産され、消費された食料の量、それが健康的な食料か、いい住まいか、暖房・照明・調理のために十分なエネルギーがあるか、などを測るものさしが必要です。これらを測り始めれば、成長はかなり違うものになると思います。

枝廣：そうですね。

ヘレナ：現在のGDPの測定で測られているのは、“商業化と自立の損失”だということを理解しなければなりません。それは、自尊心と幸せの喪失にもつながっています。

枝廣：ええ。

ヘレナ：健康でいることが、非国民になることだということがわかりますよ。GDPを上げたいなら、薬を飲んだり、化学療法をしたり、放射線治療を受けたら、病気でいたほうがいいんです。花や野菜は育てずに、買いに行くべきなのです。畑で野菜を育てると、GDPが下がりますから。そして、戦争が起こると家を新しく建て直さなければいけませんから、戦後のGDPにとって役に立ちます。



また、汚染がひどいことも、ビジネスや GDP にとっては都合がいいのです。例えば、ボトル入りの飲料水、フィルター、あらゆる清浄装置や技術……。本当は、清浄しなくてはならないという状況自体、あってはならないのですが。

重要なのは、現在のゆがんだ経済市場では、化学物質や着色料を多用し、包装されて、世界の反対側から長距離輸送で運ばれてくる加工品のほうが、自然な製品より安いということです。影の補助金とごまかしのせいです。

枝廣：まず国が測る GDP と本当の経済成長について、明確に区別したいのです。多くの方が「経済成長=GDP」だと思っています。

ヘレナ：私が分散や地域化を勧めているのは、地域の町や村だったら「自分たちの池がどのくらい汚染されたか」を進歩の指標にするという失敗はしないからです。村の半分の人に仕事がないという状態を進歩だとは考えません。影響を受ける土地や人により近い立場になれば、常識的にわかるのです。GDP がおかしいのは、抽象的で自然や人間の現実から遠いことです。真の進歩と成長を測るためには、地域独自の人間のためのものさしが必要です。

巨大企業が非効率的になり、強化しすぎています。そうではなく、社会にとって意味のある規模へと細分化していくのです。人々の多くは、例えば食料などではできるだけ家に近いところからリーズナブルな価格で入手したいと考えたことでしょう。多くの地域では、本物の繁栄の成長には脱商業化が含まれます。交換がもっと頻繁に行われるようになるからです。

もっとも、お金から完全に脱却しようといっているわけではありません。お金は便利なツールです。税制度もある程度あればいいと思います。共同体として老人や貧しい人たちを助けることができるからです。しかし、私が育ったスウェーデンでは、国が頭でっかちになりすぎて、家族や地域社会から多くの機能を奪い、それが幸せを失わせました。

■地域化こそが代替の経済モデル！

枝廣：一方には現在の経済モデルではうまくいかない、別のものが必要だという警告があり、一方では直売所や地域が支援する農業（CSA）、ダウンシフターズなどの地に足のついた実践例があります。しかし、これらをつなげるための代替となるよい経済モデルを、私はまだ見つけられていません。

ヘレナ：私が推進しようとしていることが、実は、その代替となる経済モデルなのです。根本的なレベルでは、分散化または地域化です。先ほどもお話したように、経済学には生態学についての知識が必要です。すべての命が多様性であり、だれもが個人として、団体として、文化として、人種として、独特なのです。

さらに、世界各地の人々に影響を与えている一つの標準的な消費者モノカルチャーのイメージではなく、その多様性に適応しなければなりません。そのため、人間と生態系のために、私たちは経済活動を多様性に、つまり、異なる文化の現実に適応させなければなりません。

地域化は、現在政府が後押ししているグローバル化の方向とは逆です。グローバル化には、ある種の体系的な特徴があります。第一に、生産物と消費者を分断し、投資家を投資対象から分断します。危険なことです。投資家たちは、自分たちのお金がどこでどのような影響を及ぼしているかをまったく知らないのです。それだけでも、道徳的な実践を行えない仕組みであることがわかります。

しかし、距離を短くすれば、自分の行為の影響がわかるようになります。生産者として、消費者として、何が起きているかがわかります。そうすれば、より道徳的になるでしょう。

距離が短くなれば、企業が社会の中でより見えるようになり、説明する義務をもつようになります。文化と生態学的な価値が、企業を形づくるようになるでしょう。現在は反対に、企業が文化と生態系と政府を形づくっています。地域化は「企業は地域に根付いていなければならない」ということを意味します。多国籍企業ではなく、日本の企業、米国の企業、中国の企業でなければなりません。



■つながりのある“幸せの経済学”へ

枝廣：地域化を目指す、人々の抵抗や恐れに直面しませんか？

ヘレナ：地域化というと「昔のように小さな村に住んで、農民になるということ？」と連想する人が多いですね。まず、大部分の人々の農村地域での経験は、長年社会的に無視されてきましたし、特に第二次世界大戦の後、農民たちの暮らしはとても厳しく、心理的にも物質的にも取り残されています。村にはお年寄りだけがいて、若者はさまざまな動きがある都市部にいる、ということが多いです。

ですから、地域化について説明するとき、私はまず「活気ある生き生きとした小さな町を作ることは可能だ」と話します。より健康な農業、林業、漁業を行うことができる場所なら、そこで働く人の数も多くなります。そこそこのお給料と敬意、それに仕事に伴う喜びがあれば、全体像はガラッと変わってしまうと思うのです。

新しい農民による、うまくいっている例もたくさんあります。私がいいと思うのは「地元の食べ物を食べよう」という運動です。破産寸前で不幸せだった農家が、今では繁栄しています。これらは、政府による支援なしで実現したのです。わずかな支援があれば、すばらしいことが起きるでしょう。

グローバル化の最大の錯覚は「赤字によってGDPを上げることが私たちに恩恵をもたらしている」という考えです。私たちは貧しくなっているのです。人々が年金や雇用について心配しているのであれば、この経済についての知識に目を向けるべきです。社会での私たちの安全安心のためには、現在のシステムよりも地域化のほうがよいということに気づくべきです。

枝廣：国や政府は「地域化が進み人々がダウンシフトを始めると、税収が下がる」と恐れているのでしょうか？

ヘレナ：実際のところ世界中の政府は、巨大企業を後押ししているために貧しくなっています。巨大企業に補助金を与えても、お金は戻ってきません。多くの中小企業があるほうが、より健全で安定した税収の基盤ができます。

地域化が“幸せの経済学”であることの理由の一つは、グローバル化された消費文化から離れ、お互いにつながりのある暮らしへと移ることを意味しているからです。“幸せの経済学”とは、お互いとのつながりと、周りの自然や動物や植物とのつながりをもう一度作ること。この地球上に存在した過去の大部分において、私たちはそうして進化し、暮らしてきました。それが私たちのあるべき姿なのです。つながりがあるからこそ、人間なのです。

枝廣：いろいろなお話をお聞きし、とても考えさせられました。ありがとうございました。

聞き手プロフィール

枝廣淳子：環境ジャーナリスト、翻訳家。環境問題に関する活動を通じて「伝えること、つなげること」のうねりを広げつつ、変化を創り出す仕組みを研究。(有)イーズ代表。幸せ経済社会研究所所長。

※このインタビューの全編は研究所のWEBに掲載されます



Messages

作品に寄せられたコメント

地域でつながり合おうという大事なキーワード「ローカル」をしっかりと心に落としこんでくれる素晴らしい映画です。キーワードは「Go local!」

■ 丹羽順子 (koko) — J-WAVE LOHAS SUNDAY ナビゲーター

「幸せ」と「経済」と「社会」の連立方程式を解く大きなヒントがここにある。持続可能性を損なうグローバル化の彼方にあるのは何か……？この映画を見ながら、きっとわくわくすることと思う。

■ 枝廣淳子

あなたが今日のくらい不幸せであるかということに思いを寄せることは出来ないけれど、あなたが幸せになりたいと、幸せ探しをしているのなら、先ずはこの映画を観ることを、「自信をもって！」薦めます。

■ 龍村ゆかり (映画『地球交響曲』プロデューサー)

震災後の今こそ、食・エネルギー・福祉を地域で循環する経済・社会に作りかえるときが到来したと思います。また、石油埋蔵量のピークも過ぎました。これからは石油や原子力発電に依存しない社会への転換が必須です。

日本の豊かな農山漁村の資源を活かし、コミュニティビジネスを沢山つくり、ローカルを軸とした経済や暮らしへとシフトしていけば、心豊かで幸せな社会をつくることのできるのではないのでしょうか。

■ 大和田順子

(『アグリ・コミュニティビジネス』著者／LBA 共同代表)

ローカリゼーションは言葉ではなく実践だ。そのことをリアルに伝える映画だと思う。まさにその実践を続けている者として、多くの人に「経済は地域で、知性は世界で」という共通項を知ってほしいと願う。

■ 田中優 (未来バンク代表、天然住宅共同代表)

私にとってのローカリゼーションは、自分が生きる場所を定め、その場所を愛すること。そして地域の人たちとつながりあうこと。「ローカリゼーション」は世界をつなぐ普遍的なテーマだと思います。素晴らしい映画でした。

■ 鎌仲ひとみ (映画監督)

本当の豊かさは、これまでの「より速く・より大きく・より多く」に替わる、3つの「S」(スロー・スモール・シンプル)の中にこそある。3・11後の今、ヘレナの映画に導かれて、幸せへと「降りて」ゆこう！

■ 辻信一 (文化人類学者、環境運動家)

モノが溢れていて、なんでも便利な今。なのになぜ、こんなに苦しいんだろう、悩ましいんだろう。誰も教えてくれなかったその理由が、この映画に隠されている。誰も教えてくれなかった答えが、この映画に示されている。行きたい道へ、楽しい道へ、歩き出すときが来た。

地域へ散らうぜ、Down To Earth!

■ 高坂勝 (『たまには TSUKI でも眺めましょ』オーナー、『減速して生きる—ダウンシフターズ』著者)

お金や便利が幸せを運んでくるわけじゃない。ではどこに幸せはあるのかな？分かれ道に立っていると気づいているけれど、どんな道を選べばいいのだろう？……そんな問いを持っている人も、この映画を観れば、これまで想像もしなかった未来がありえると、はっきりイメージできるはず。豊かさとは何か、という問いを原点に立ち戻って考えさせてくれる映画です。

■ 上田壯一 (Think the Earth プロジェクトプロデューサー)

経済成長がいつまでも持続できないものだというのは、音楽ファンの立場でもはっきり分かります。レコード会社が大きくなりすぎると冒険しないし、洗いやアーティストをじっくりと育成しようとしないうえ、最大公約数的なレコードしか出さなくなるからこそ行き詰まってしまう。どの世界でも原理は同じだと思います。Small is beautiful!

■ ビーター・バラカン (ブロードキャスター)